

妊孕性温存治療の費用について

保険適応はないため、全てが自費診療となります。複数回にわけて保存した場合など費用は前後することもあります。詳しくはお問い合わせください。

初回検査等	5,000 ～ 10,000 円	
凍結開始時	50,000 円 (消費税別)	1 年間維持管理費を含む
保存更新時	20,000 円 (消費税別)	1 年間維持管理費を含む
カウンセリング料	30 分あたり 5,000 円	

不妊となるリスクを調べるには

日本癌治療学会ホームページ <http://www.jsco-cpg.jp/fertility/guideline/#/>

妊孕性温存ガイドライン

表 2-2 化学療法および放射線治療による性腺毒性のリスク分類 (男性) ASCO 2013

筑波大学附属病院 総合がん診療センター
生殖医療部門

029-853-8096

もっと詳しく知りたい方へ

インターネットのサイト

筑波大学附属病院ホームページ 妊孕性温存外来

<https://www.hosp.tsukuba.ac.jp/outpatient/special/fertility.html>

日本がん・生殖医療学会 「がん治療を開始するにあたって：将来お子さんを希望される男性患者さんへ」

http://www.j-sfp.org/ped/dl/cancer_treatment_brochure_m_jp.pdf

亀田メディカルセンター 「がん治療を始める前に！ 卵子・精子の凍結保存を考えてみませんか？」

<https://www.youtube.com/watch?v=yK9bF1kRyXc>

国立がん研究センター がん情報サービス 「妊孕性」

https://ganjoho.jp/public/dia_tre/diagnosis/fertility/fertility_01.html

日本造血細胞移植学会ホームページ 「妊孕性の温存」

https://www.jshct.com/modules/patient/index.php?content_id=14

がんに関する相談窓口

いばらき みんなのがん相談室

<https://www.pref.ibaraki.jp/hokenfukushi/yobo/sogo/yobo/cancergrop/caminna.html>



知っておきたい 精子凍結保存の知識

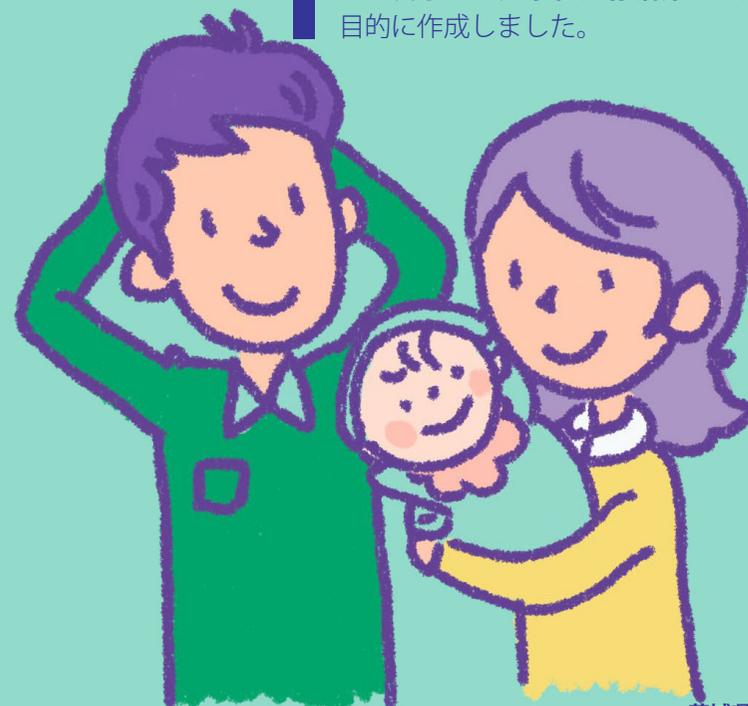
これからお子さんを望まれる男性患者さんへ



がん治療の進歩によって、多くの患者さんが、がん
と共存、あるいは克服することができるようになって
きました。一方で、がんの治療によっては精巣に
ダメージが加わる場合もあり、治療後にパートナーが
妊娠し、お子さんを授かる可能性(妊孕性)が
低くなる場合があります。

こうした患者さんに対して、妊孕性を温存する治療を、
がん治療前に行うことが可能な場合があります。

この冊子は、**妊孕性温存治療**の理解に役立つことを
目的に作成しました。



がん治療と妊娠

抗がん剤や放射線治療によって、精巣にダメージが加わる場合があります。治療の内容によっては、治療後に精子をつくるはたらきが低下して、自然にはお子さんを授かることが叶わない場合も少なくありません。がん治療により精巣へのダメージが想定される場合に、がん治療前の精子を凍結保存することができます。将来お子さんを希望した際は、凍結精子を利用することで妊娠を試みるすることができます。これを妊孕性温存治療といいます。

抗がん剤と精巣毒性

抗がん剤の種類によって、精巣への毒性はリスク分けがされています。最もリスクが高いシクロホスファミドなどの薬は、高リスク群とって投与量などによっては治療後に無精子症となる可能性が高いとされています。また、白血病の骨髄移植前に行う放射線全身照射も、精巣へのダメージがとても大きいとされています。

妊孕性温存治療と精子凍結保存について

精子を凍結し、保存して不妊治療に活用することは、すでに確立された治療法として広く認められています。凍結した精子は、パートナーの卵子と顕微授精することによって受精卵（胚）を作り、パートナーの子宮に移植することになります。精子はマスターベーションにより専用の容器に採取していただきます。筑波大学附属病院では、専用の採精室もご利用いただけます。

射精による精子が採取できない場合

マスターベーションができない方や、射精障害がある方には、行動療法や薬物療法によって射精できるようお手伝いいたします。しかし、どうしても射精が難しい場合や、射精ができて無精子症という場合もあります。このような場合は、精巣から直接精子を採取する手術（精巣内精子採取術、TESE）の選択肢もあります。



妊孕性温存治療の成績

凍結時や精子の状態や、精子を実際に利用する時点でのパートナーの年齢などによっても大きく異なりますが、1回の顕微授精で卵子の50-80%が受精卵（胚）となり、1回の胚移植で妊娠率は30-35%程度とされています。妊孕性温存治療を行えば、必ず将来パートナーが妊娠し、お子さんを授かることが保証されたわけではありません。以上のことをふまえた上で、妊孕性温存を受けるかどうか、また凍結精子を用いて妊娠を試みるかどうかは、本人だけでなく、パートナーと十分に話し合う必要があります。

当院における凍結物の管理について

独身の方や、がん治療の兼ね合いですぐに妊娠を希望しない場合は、長期保存が想定されます。保存については1年ごとの更新となり、毎年更新手続きが必要です。パートナーに対する不妊治療については原則凍結した施設で行いますが、万一凍結施設の閉院や閉鎖などがあった際には、凍結物の移送が必要となります。また、精子を保存した患者さん本人が死亡した際やパートナーが生殖年齢（当院では50歳）を超えた場合、さらには更新ができない場合、凍結物は破棄となります。



妊孕性温存治療を行う前に必ず理解しておきたいこと

- 今後行う予定のがん治療によって、どの程度妊孕性が低下するかを理解している
- 妊孕性温存の方法、必要な期間、費用、がん治療への影響を理解している
- 妊孕性温存による妊娠を試みるかどうかは、本人だけでなくパートナーと十分に話し合う必要があることを理解している
- 妊孕性温存治療を行えば、将来必ずお子さんを授かるものではないことを理解している

上記のほか、妊孕性温存治療について主治医および生殖医による十分な説明を聞いて理解していることが重要です。

